特248
598

印刷を以て
謄寫にかへる

昭和十三年六月一日

森一兵鮮滿視察談

名古屋新聞社員定例連絡會（本社會議室）にて

始

昭和十三年五月四日京城に於けるロータリー大會席上にて

朝鮮慶州博物館前にて

特248
598

森一兵鮮滿視察談

五月十一日に名古屋を發ちまして昨日(五月卅一日)「ツバメ」で歸つてまゐり、恰度三週間留守にしました。承りますると、非常に營業成績が良好で、販賣においても、廣告においても、過去にないレコードを作り、それで今日の吉日を卜して、千早稻荷樣(本社屋上鎭守社)の祭典を行ひ、社員一同が赤飯を戴き、祝意を表するといふことで、私も非常に心丈夫に感じた次第であります。

これは寧ろ社長は年中旅行してをつた方が、却て社員諸君の能率が上るのではないかと、安心と愉快を感じたのであります。今後或は時をみて長途の旅行をも、許して頂かれる機會があるのではないかと思つて居ります。(笑聲)

今回の旅行は別段新しい事業を滿洲、朝鮮において計畫するといふのでもなく、固より名古屋新聞の販賣擴張をやらうとか、廣告募集をしやうとかい

ふのではないので、私が新聞社長としての立場上、國家政策の上から、將來滿洲、朝鮮と日本との關係がどうなつて行くかといふ見透しをつけんための見學でありまして、この問題の歸趨が、即ち日本國運ののるかそるかの分れ目であります。勿論これには北支、中支、南支の方を見る必要もありませうが、今回は時間もなく、交通も不便であり、且つは滿鮮と異り、事變の結末が、まだ進行中ですから、次ぎの機會に讓り、現在秩序が附いてをり、今後永久に日本の宗主權といひますか、指導力の下にあることが、決つてをる地方を見やうと思つたのであります。

何分大陸のことで、都市と都市との間の距離が遠く、急行列車の數が少なく、飛行機もなか〳〵座席が取れぬといふ不便さで、三週間の中に朝鮮では十日間に六泊、滿洲では七日間に五泊致し、前後二十日間に十一泊致したのでありまして、後の十日間は汽車或は汽船に寢たといふやうな狀態で、尙ほ且つ早朝着いて、夕方發つといふやうな便利な汽車が少ない爲めに、ハルビン新京などでは五、六時間位いしか視察に費やしてをりません。そんな次第ですから、唯汽車の窓から見た、私の第六感と、讀むだり、聞いたりしてゐる豫備知識とによつて判斷を致したので、固より正確なお話しを致すわけにはまゐりません。先方には私の舊友で、相當大官になつてゐる人もあり、實業界の要職に居る人もあり、會つて話を聽きたいとも思つたのですが、お役人さんに會ふといふことは非常に面倒でありまして、間が惡いと一日、二日とその人に面會するがために滯在をしなければならず、また面會を約束した時間が來ても、その時間に訪問して、果して直ぐ會へるかどうか、會議とか來客とかの時間が順々と延びて、一時間も待たされる、つひ半日位はつぶされてしまふ。さて會つて話して見ると、偉い役人になるほど屁のやうな話しを聽かされる、夫の新聞に出る車中談程度のもの以上の話しを聽くことも出

來ません。その次ぎ位の役人となりますと、戰々競々で、下手なことをいへば馘になり、內地に追ひ歸されてルンペンになるといふので、これもわざ〳〵訪問して話を聽いても大した參考にならぬ。

重寶な遊覽バス

奉天、新京等の土地の狀況は、遊覽バスに乘つて巡覽いたしました。ハルピンと旅順、大連とは、舊友が是非案內してやるといふことで厄介をかけましたが……遊覽バスは實に便利なもので、縫ふが如く要所々々を巡り、新京でも三時間半、奉天でも矢張り三時間位で、見落しないプロに由つて走り、バスには明朗な小娘が乘つてをり、いづれは相當の人の書いた案內記を暗記して、美辭麗句を挿み、聲張り上げてやつてくれる。新京での寬城子、南嶺の戰蹟說明などは、一々手を擧げて指示しながら、二十分もかゝつて詳細にやる、まるで浪花節の現地放送を聞くやうです。インチキな記章など胸に附けて、バスガールの後から、ゾロ〳〵續いて行く團體氣分は、眞にえも言はれぬ和やかさでありまして、寧ろ知人などに仕事を差措き、一日十數圓若しくは二十數圓の自動車賃の厄介迷惑をかけて案內してもらふこと、その人たちの深切は眞に尊いが、一圓五十錢のバスの賃金で見物した方が氣輕に見物ができ、中で今一度見直しておきたいと思つた箇所だけ、別に出掛けるのが賢こい行方ぢやと思ひました。

ロータリアンである便利

滿洲にはハルピン、新京、奉天、大連にロータリー倶樂部があります。ハルピンは例會日でありませんでしたが、其他は順々に例會に當りましたのでそれに出席を致しました、私は會員諸君の中に、私に話しておいた方が良いといふ御意見なり、話柄なり御持合の方は、例會の後に居殘つて、差向ひで一つ自由に御指導に預り、私に知識を與へて戴きたいと申しましたところ、

どのクラブでも數人の方が居殘つて、私に有益なる知識を與へて戴いたのであります。これが今回の旅行をどれほど助けたかわかりません。私はロータリー・クラブのやうな、私利私益を謀らないで、相互に他人の爲めに奉仕することを目的とするクラブの存在の價値を痛切に認識いたしました。

結局あゝしたところの旅行は、**自分の眼で見て、第六感で判断すること、それから、その地方に永住して自分の腕一本で叩き上げて、現在も人の厄介にならずに飯を食つて居る人たちの話を聽くのが、一番正確で面白くて、有益ぢやといふことをシミ〴〵實驗致しました。**

金剛山は行者の靈峰

非常に切り詰めた、忙がしい旅を致し、大連から直行五十時間、昨夜遅く歸りまして、尚ほ數時間、手帳の覺書を十枚ばかりのメモに整理致しまして今朝無事出社し、諸君の前で三十分なり五十分なりお話しするといふ元氣を持つて居ります。老軀ながら未だ十分働くことが出來るといふ自信を得たのであります。これが何よりの土産であると思召して戴くやうに御願ひ致したい。

まづ朝鮮にまゐりますと豫て自分の趣味から永年憧れてゐた佛國寺石窟庵それから慶州の古蹟などを見、京城では今回の目的である、日本滿洲を包括する第七十區のロータリー倶樂部大會に出席致し、それから有名な內外金剛山の見物を致しました。まあ斯樣な見物談はこの席では省きますが、金剛山は日本でいふと上高地であるとか、寒霞溪であるとか、山あり、水あり、溪谷ある、極めて和やかな景色で、餘り骨の折れるところでないと思つてゐましたが、さて行つて見ると驚くべし、役の行者の荒行をするやうな、嶮峻極まる巖山で、その岩の殆どは斷崖絕壁であります。それを攀ぢ登るといふので上八潭や新萬物相などは、全く綱を用ひざるロッククライミングといつた

感じです。一足踏はずせば千仞の谷に轉げ落るといふやうなところで、その困難實に名狀すべからざるものであります。六十歳以上の參加者の中、最後まで駕籠にも乘らず、徒歩でプログラム通り三日に亘りて、この難行を卒業したのは私一人でありました。殊に最終の日の如きは雨が降りましたが、雨を冒して内金剛を摩訶衍までやつてしまひました。先年この席に居られる與良相談役が、月明の夜に毘盧峰（金剛連山の最高峰）に登られたといふことを聞いて、大したことはあるまい、嘗つて猿投の山に日の出を拜まれ、暴風の日に高千穗の峰に登られた、與良さんとしては、月夜の金剛山に登られる位は、驚くに足らんと當時思つてをりましたが、今度自分が實驗して見て、與良さんの如何に頑張りの強いかに吃驚しました。つまりこの山に登るのは健全なる心臟と体力との問題であつて、風景を見物する即ち風流は第二次的であるやうに思ひました。

朝鮮人の心氣一轉

朝鮮にまゐつてみまするとと、滿洲事變からめつきり朝鮮人の心が變つたといふことを、會ふ人毎に話されました。それまでは朝鮮人の間に、矢張り獨立思想とか、共産主義とかいふものが潜在して、所謂、抗日、排日、氣分が上下に殘つて居たのでありますが、滿洲事變後は彼等もスツカリ諦らめてしまつたものと見えます。**最早日本に賴り、日本の勢力に依存して行くよりほかに、朝鮮民族の生きる道はないと感じたやうてあるといふことてあります。**さらに今回の支那事變において、一層その感を深くしたといふことを異口同音に申してをります。

汽車の寢臺車中で、午前五時ごろ眼覺めて、窓から覗いて見まするとと、もう朝鮮の農夫が田圃に出て働いてをります。朝鮮には鶴が多くをりますから初めは鶴かと思つてよく見て見まするとと、それが人間であります。私は日露

戰爭の初まりに朝鮮に行き、其後十年目位に、今度で四回朝鮮に渡りましたが、かくまで勤勉になつたかと驚きました。當時の朝鮮人と今日の朝鮮人とは全然別な民族になつたやうな感じが致しました。

由來朝鮮人は才があつて、機智に富んだ民族でありまして、時々朝鮮人にからかつてひどい目に會ふことがあります。私が金剛山に行きましたとき、オープンの運轉臺に乘りました。相當のがたバスであるし、道路は大きな石ころで、バウンドが激しいものですから、運轉手の朝鮮人に「かうひどく搖れては、禿頭に怪我をしないやうに氣をつけてくれ」といひました。すると言下に彼は、「それよりも頭で幌を破らぬやうにして下さい」と來た。(哄笑)後の方から「新聞社長を辭職せよ」との懸聲が掛つた。そんな風な國民ですから支那人のやうに輪廓の大きい、線の太いところはなく、小才の利く、鹽の辛い人種ですから、餘程考へてかゝらなければならぬと思ひます。

朝鮮統治と宇垣將軍

現南總督は忠實なる宇垣前總督の政策の踏襲者で、これを完成すべく努力してゐる方だと見ました。朝鮮の今日あるは結局宇垣さんの施政方針に基いておるやうに見えます。私が先年宇垣前總督に朝鮮で會つた當時、北羊南棉といふことを唱へてゐた。即ち北の方に羊を飼ふ、これが北羊で、南棉とは南の方に棉を植えるといふことで、外國から優秀な羊の種や、棉の種の輸入をして、一生懸命にやつた。更に產金政策といふものを樹てた。當時私は「朝鮮で金が出るといつても、堀出すだけの費用と金の相場とが引合ふか合はぬかが問題だ」と尋ねたところ總督は「ナーニ勞銀は不換紙幣で拂ふからいくらかゝつてもよい、金を地の底から堀出しさへすればいゝのだ」といふ、靑砥藤綱の經濟論でありました。ところがいよ〳〵日支事變が始まつてくると、今では宇垣總督のいふが如く、日本國としては、コストに拘らず、とに

もかくにも金を堀出さなければ軍需品を買ふことが出來ない、といふ時代が來たのであります。宇垣將軍は常に不言實行といふことをいつてゐるが、あの人は不言實行などといふ老獪な政治家ぢやない。自分のやることは聲明して、强引な實行力で押して行く政治家で、ヒツトラーとかムツソリニーといつたやうな型の政治家であります。話は横道に入りまして、相濟みません。最近に至り、內鮮一致、即ち朝鮮において、內地人と鮮人とを、全く同一に取扱ふといふので……これは眞に結構なことですが、小學校の教育も教育令を改正して、內鮮人の子供を同じ小學校で教育する。また志願兵制度を設けて朝鮮人の兵隊をどん〳〵作るといふやうにやつてゐる。二三の人々に會つて聞いて見ると、日本人の兒童と朝鮮人の兒童とを同じ學校で教育するといふことになると、朝鮮人の子供の方が多いから、教育程度も低下せねばならぬ。小供のことであるから、朝鮮人の感化を日本の子供が受けることになりはせぬか、朝鮮人の質を向上させるにあらずして日本人の子供の質を低下させる、また內地の高等教育を受けさせる準備としても、智能の遲れる虞れはないか、結局金に不自由のない階級は、その子供を日本內地に送り歸へして教育する必要が起りはしないか、それを非常に恐れるといふことを申してゐたそれから志願兵制度にしましても、志願するものは學校の教員にも、巡査にもなれない小インテリが志願をする傾向がある、兵の素質を弱くする虞れはないかなどと申してゐました。私は兵隊のことはよく知らない、總督や軍司令官の方で、然るべくやつて居られることゝ思ふ。

野口產業王國と工業の北鮮

南總督はロータリークラブ大會の席上で、北鮮を見ずんば朝鮮の現狀は判らぬといふことを申されました。北鮮には野口コンツエルンといふものがある、野口といふ人が元は窒素肥料會社をやつてをりました、それが段々機構

を擴大して、今北鮮ではあらゆる資源、あらゆる産業は全部この野口産業王國でやつてをると申して差支ない、三井も三菱も朝鮮では手も足も出ないのであります。私は何れ機會を見て、是非一巡見に行くつもりでをります。今の南總督も野口産業王國を中心として北鮮を工業地帶にする、かういふ計畫を樹てゝゐるのであります。夫の東洋第一と言はれる長津江の大水力發電事業の完成に由り、赴戰江の二十萬キロに併せて五十萬キロの電力が得られ、北鮮一帶は工業王國となりませう。南鮮は農業並に漁業であり、北鮮は一大工業朝鮮になるであらうと考へられるのであります。

巖の朝鮮と土の滿洲

金剛山を見ましたときに、金剛山は全部花崗岩の山でありまして、十數里の間花崗岩の塊りであり、中には一枚の岩で、何萬トンの軍艦が、腹を出して轉がつたやうに、三千坪もある、一枚岩もあるといふ話であります。私は同行者に向つて日本がどの位物資が缺乏しても、この山一つあれば花崗岩には缺乏しないといふことを申したのであります。足一とたび、滿洲に入りますと、奉天からハルピン地方までは、何時間、何十時間汽車に乘つても山一つなく、トンネル一つなく、一面の土と泥との世界でありまして、畑を見てもバラスのやうな小石一つ見ないのであります。ボコ〳〵したやうな、赤土で、滿目荒凉といひますか實に形容し難い廣い原野であります。其處にはもう未墾の土地といふものがないのであります。線路の兩側二百メートル位のところは、匪賊の隱れる場所がないやうに高粱を作らせぬさうですが、それから先きは全部耕やしてあります。五頭立、六頭立の馬に曳かせた鋤をもつてどん〳〵鋤いて行く、その跡から種を蒔いて行く者、その上から土をかけて行く者、日本軍のタンクが進んで行くところ、敵兵が掃蕩されてしまふが如く、鋤がどん〳〵通過すると、跡からすつかり種蒔まで完成されてしまふ

さうであります。種蒔の濟んだばかりの田圃の中に道がついてゐる、どうしてア、いふところに勝手に道を作るのかと聞いて見ると、道を避けてゐては手間取るから、道も何も一所くたに鋤ですいてしまつて、跡から元のやうに道を作るのだといふ話であつた。如何にも大仕掛なことをやるものだと考へました。更にすれちがひに撫順の方から來る列車には、六萬キログラムといつたやうな貨車があります。これはグラムトンにして六十トンであります。日本では精々十五トン位が一番大きい貨車であるが、向ふには六十トンといふ貨車があり、それを引張るために百五十トンの汽關車があります。アメリカのやうにマイルトレーンといふ、長さ一マイルの貨物列車を計畫して居ります。大連ハルビン間に「アジヤ」といふ急行列車は……非常に滿鐵自慢の列車で、私も二度ばかり乘つて見ましたが、内部の設備も立派に出來ており平均八十キロの速度で飛ばしますが、最後尾の一等展望車は餘程動搖が激し

くつて、大連からハルビンまで乘つたら、目を廻はすのぢやないかと思ふ位早い速力で走つております。箇樣に滿洲の事情といふものは、日本内地においては殆ど相像もつかないほど荒漠たるものでありまして、中南支の百姓は支那兵の屍体のゴロ〳〵してゐるのを、そのまゝにして耕作してゐるさうですがドウモ日本人のやうな細い神經では、とても仕事に懸れません。我社の同人諸君の如きも暇があれば是非一つ滿洲の方を見て來て頂きたいと思ひます。

朝鮮滿洲は決してブラジルやアルゼンチンといつたやうに、肥料をやらぬでも、何年の間作物が出來るといふやうな處女地ではない。南滿の如きは何千年の間、勤勉な支那農民に依りて耕作され、地味を搾取された土地ですから、決して肥へてはおらぬ、京城の李王宮の秘苑を拜見したとき、案内の鮮人宮内官が欝蒼と茂つてゐる林を指しながら、誇り顔に、「朝鮮には禿山があるが、手入れの仕方によつては木も育ち、草も生へて美事な山になります

」と説明をした、すると一行中に年をとつた人がゐて、「私の見るところでは、この御苑の土は人間の住むに堪へるやうな色をしてゐますが、鐵道に乘つて來た沿線の土地を見ると、どうも人間の住み得る土地ではありません」（笑）といつて、鮮官を苦笑せしめてゐました。「人間の住むに堪えぬ土地の色」といふ名句を吐く人がゐたのであります。

高粱と滿洲農民の生活

私は曠漠たる滿洲の土地に、餘り甘くもなささうな高粱ばかりを支那人が作る。これには何か理由があるのであらう。大豆は勿論小麥も、その他玉蜀黍や、陸稻も出來るといふことを聞いてゐる。然るに高粱を主作物としてゐるのには、何か高粱に魅力があるに相違ない。これは一つ高粱の粥を食つて見やうといふので、大連に參りました時、知人に「料理屋の飯はいつでも食へるから、細君に賴んで高粱の粥を作つてもらいたい」と賴んだら、苦力が石油の空罐からしやくひ出してゐるやつはドウぢやといふ、まさかあれを食つて、もし腹痛でも起しては大變だから、ぜひ、君の家で細君に焚かしてくれと賴む。なんで高粱の粥がそんなに食いたいのかといふから、私は滿洲人が盛んに作つてゐるから、恐らく何か魅力があるのだらうと思ふのぢやと申しますと、彼氏は、「君、それや大變な間違だ。さういふことなら何も高粱の粥を食ふ必要はない。高粱の稈は滿洲における唯一の燃料であり、かつ重要なる建築材料でもある。滿洲人は高粱の稈で屋根を葺き、垣根を作り、そして橋も架ける。更に冬季においては、これを唯一の燃料としてゐる。食料だけなら、他に幾らでも作物があるが、滿洲人としては、高粱の實も必要であるが、寧ろ稈の方が必要であるのぢやと話してくれました。成る程汽車の沿道に高粱を建築材料に用ゐられてゐることが、よく判りました。今高粱の稈を原料にしてパルプを作るといふ會社が出來てゐるさうだが、パルプの方

に高粱稈を召上げるならば、彼らが燃料としての石炭や、建築材料、材木を買ふだけの錢を拂はなければならんぢやないかと問ひますと、全く其の通りであるとのことでした。何千年もやつてゐる耕作や、生活樣式やを變改することは困難なりと見ました。假令ば滿洲人の農事改良に就き、これまで滿鐵などで、この土地にはかういふものが適するから、種を蒔けといつて、くれてやりますと、酷いのになると炮烙で炒つてそれを蒔く、蒔かぬと叱られますから、こうして蒔く、結局ごうしてもあの種は一向に芽が出ないといつて矢張り高粱を蒔くといふ話を聞きました。机の上の研究で、農業といふやうな自然發生的な生業を、頑固な支那人に改良せよといふことは、なか〳〵容易ならぬことであると考へました。

南滿農業に手不足はない

由來滿洲の農業の生產額が、作付段別に比較して非常に少いやうに見ゐるが、それは地力が劣つており、又衰へてゐるためではないかと、ある人に聞くと、勞力が足りないので肥料をやることも、手入をすることも、怠つてゐるし、行届かないのであるといふ話もありました。ところがさうぢやない、小作法が悪いのだ。支那の小作法は一年契約で、小作料は金納前納である。それで若しその年一年が不作ならば裸になつてしまい、其の上明年の小作料も拂へぬから、逃げてしまふ。かういふ風ですから肥料もやらなければ何もしないで、打つちやらかしてゐるので、決して勞力が不足だからではない、ハルピンから北の方へ行くと勞力は足らないやうだが、奉天から南の方は、寧ろ人が剩つてゐる。決して不足してゐない。その筋の人達は直ちにこの小作法を改正しなければいかんと考へるかも知れないが、たゞ一片の法律でもつてこの小作法を改正するといふやうなことは、勿論至難なことであると思はれます。

北滿の農業移民と名古屋

南滿方面における農業の開發は餘程困難であると思ふが、今後日本人が開發して行くのは北滿である。牡丹江とか、佳木斯の方には、どん〳〵人を入れる餘地があるといふことでありました。私も是非今一度北滿を見直したい殊に名古屋としては北鮮と北滿とは、必ずその勢力圏内に納めたいと存じました。更に沼澤が恐ろしく澤山ある、私は見ませんでしたが、飛行機で何時間も沼澤の上を飛ぶといふことであります。この地方にアメリカ式の乾澤事業をやるとすれば、莫大な資本も要するが、一石二鳥で、大水力電氣事業計畫と、現在の滿洲の農地に比較するほどの、大面積の肥沃なる農耕地が出來るといふことでありました、若しこれが事實であるとすれば、この方面に向つても日本の農民發展は有利であると考へます。そこで名古屋の商業計畫と北鮮の經營とを結びつけたいと考へ、歸途は大連に出ないで、ハルピンから

直ぐ牡丹江に出て佳木斯を見て、羅津、又は清津から敦賀へ歸り、名敦道路をドライブして名古屋へ歸りたいといふプランを樹てたのですが、敦賀と北鮮との間は船の便利が悪いので中止しました。この線は距離も一番短く、名古屋としてはこの線を強化するより外に滿洲を經濟的に制覇することは出來ないと考へたのであります。今日滿洲の支那人街を歩いて見ると名古屋製品が氾濫してゐる。しかしそれは全部大阪商人の手を經て輸入され大連航路に由つてゐるのであります。

敦賀港の國營を要す

名敦道路が完成されて、名古屋と敦賀間百三十六キロの舗裝された自動車道路が出來たとしても、今日のやうに敦賀、清津、羅津間を十日目に一ぺん一週間目に一ぺん、しかも小さな船でやつておつては、決して滿洲への交通機關にはならないのであります。そこでこれを何んとかして大連航路と同じ

に、せめて一日置きに七千トン級八千トン級の船を出す位にしたい。滿洲の人の話を聞くと、清津、羅津の築港計畫が必要であれば、どんなことでもできる、現にやつてゐる。ところが敦賀の方の設備が出來ない。この方の設備が出來ない以上は、君のいはれる日本海航路の强化は決して完成しないとのことでありました。また或る人は、港ばかりできても、荷物が出廻らなければ、船を動かすことはできぬと、然し人の通行が先きか、通路の改修が先きかといへば先づ道を附けねばならない。敦賀の事情は私はよく知らぬが、これは名古屋新聞の提案によつて大に敦賀港改築を國家事業としてやらせたいといふ希望を起しました。敦賀には、一方に東京を背景とする新潟、伏木といふ競爭者がありますが、**港灣は產業機關でありますから、政治の都たる東京を考慮に入れることはありません。矢張り、大阪と名古屋とに接近したる地方を選ぶことが、國策として必要なりと信ずるのであります。**私は名古屋市民が全力を擧げて敦賀に協力し、速かにこの築港計畫を進め、少くとも一萬トン級の船が敦賀の埠頭に横づけになるやうにしたい、そして北滿、北鮮しかして名古屋、かういふものを一本の通商道路とするやうにしなければならぬと痛切に感じたのであります。

日本民族は故郷に還れ

大日本民族の今後の使命は日本民族が大陸に發展するより、外に方法はない、それは政治上の權力とか、產業上の資本的利權とか言ふではない、日本人自身が、大陸に移住することを意味するのであります。佛國寺に泊つた夜八事の山で梅雨時にコツ〳〵と鳴く鳥がある、私はこれは水鷄だと思つてゐましたが、高松定一君や森村畵伯の說によると正体を見たことはないが、水鷄ではない別の鳥ちやと云ふことでした。それが佛國寺に泊つた夜、山で鳴いてゐる。私は家に歸つたやうな感じがしたのであります。その土地の朝鮮

人に聞いて見ると鳥の正体は見たものがないとのことで、丁度八事の山にゐる鳥と同じく、朝鮮でも姿を見せない鳥と見えます。更に佛國寺、慶州等の佛像を見ても、どうしても高麗新羅時代の朝鮮の藝術と、日本の飛鳥、奈良平安各時代の藝術とは、今の渡鳥と同じやうな系路を取つて來たものであります。何雜誌だつたか、日本民族は海からも來てゐるが、主な民族はやはり中央アジヤから蒙古、滿洲、朝鮮を經て來たものと思はれると書いてあつたが、私もどうもそうぢやないかと感ぜられる節があります。して見ると今日は我々日本人が鄕里に歸へりつゝある運動をしてゐる譯であります。世人は滿洲事變以降支那事變に至る日本民族の活動は、日本民族が東亞を征服する大陸政策であるといふが、私から見れば**日本民族が自身の鄕里へ歸へりつゝある大旅行であると考へる**。日支親善とか、日滿親善とかいひますが、日漢兩民族は、結局心から親善し得ない、恰かもフランスとドイツと同じやうに

甚だ不幸なことではあるが、宿命的に一致融合し得ない民族ではないかとも考へるのであります。京城、奉天、旅順、その他の博物館で、古碑とか、古碑の石刷とかを見ると、あの地方の英雄には、倭寇擊退の偉勳を表彰記念した碑が澤山ある、日本の海賊群、即ち八幡大菩薩の水軍は、非常に勇敢なもので支那海、日本海の沿岸は、到るところ掠奪をやり、亂暴をやり、それ等の地方の人に迷惑をかけてゐたものと思はれる。

だから排日とか抗日とかは昨日や今日に始まつた問題ではなく、何百年前から支那民族は排日抗日について遺傳的な敵愾心を持つてゐる人種で、今日の支那事變も、大仕掛な倭寇と思つてゐるかも知れません。從つて日本民族と支那民族とが同文同種であるといふやうな、學問的に根據のない一つの合言葉で、これで親善になるかは、なか〳〵容易に期待出來るものでないと考へてゐます。しからばやはりチエツコ、スローヴアキヤや、オーストリヤにド

イツ民族が多數に移住してゐるやうに、滿洲なり朝鮮なりに、日本民族が何百萬、何千萬と移住して國を建てる外に、本當に日本と滿洲、日本と支那、日本と朝鮮の國交が安定される方法はないやうに私は考へてゐます。

在滿日本人の優越感

現に滿洲に參つてゐる人達に聞くと、ごうも日本にゐるよりは滿洲の方がよいといふことを度々聞きます。支那の日常生活が、日本に居るよりは良いといふ意味ではないやうで、人間の優越感を滿足させるといふところに、非常に生活の慰安を感じてゐるのではないかと思はれます。日本人の滿洲における民族的優越感は實に非常なものでありまして、私はハルビンの滿鐵クラブに行つて晝飯を食つたが、そこのボーイとかウエートレスは殆ごロシヤ人であります。何れも元は相當の地位にあつた軍人とか、金持とか、或は會社の重役でもあつたかと見える堂々たる品格のある人士が、給仕人として、百五

十圓か二百圓位の若い滿鐵社員にまで、鞠窮如として、ビフテキを持つて來い、コーヒーを持つて來いといはれて、サーヴィスしてゐる狀態であります。支那人は勿論問題ではありませんが……さういふ風に、白色人種をも頤で使つてゐるといふ、相當優越感を感じてゐる、しかし優越感といふものは**畢竟するに虚榮心の一種で、實益は伴はない。優越感の滿足をえて金の儲つた例はない。**宿に泊つて、番頭や、女中にペコ〳〵された時には、必ず過當なチップを張り込んで、旅費は決して剩らない。列車の赤帽に十錢やるところを五十錢やれば、五人前のチップをやつて、彼氏にちよつとシャツボを取らせるだけの優越感の輕い快感で、實益が伴ふものではない。東京人が大阪人と喧嘩して、ボカ〳〵と頭をなぐりつけると、大阪人は逃げてしまふ。江戸兒は得意になつて上方贅六は弱いといつてゐるが、安んぞ知らん、上方者は「アホラシイヤ、オマヘンカ」といつて、江戸兒を馬鹿にして、結局この

江戸兒はいつの間にか、經濟的に甘い汁を大阪人に吸はれてしまつてゐる。さういふ事態が滿洲なり支那なりに、今後起らないかといふことを私は保證し難いのであります。なぐり合に勝つといふことは、腕力の强い者が勝つので、財的の實力を行使して、經濟戰に打ち勝つといふことは非常に困難なことである。所謂**優越感に滿足するだけでなく、勝利の實益を獲得するといふことに我等は目覺めなければならぬ**といふことを感じたのであります。

日本人の支那人化

新京、奉天、大連のロータリークラブに出席いたし、求められるまゝに、私の新日本服主義文化運動につき話をいたし、滿洲では日本人が支那人を感化せず、反對に支那人に日本人が感化されるのでないかを非常に惧れるといふことを申しました。何故かといふと世界中に、日本人ほど日常生活の人生の享樂に惠まれてゐない國民はないのであります。日本の役人は賄賂をとつてはいけない、出入商人から、十圓か二十圓かの商品券を貰つたり、待合で馳走になると首を切られ、甚だしきは牢に入れられる。銀行會社員も決してコンミツションを取つてはいけない、コンミツションを取つた者は直ちに免職される。博奕を打つてはいけない、ボールを一個かけても、ゴルフをやつてはいけない、負けた者の入費負擔では麻雀をやつても警察へ引張られると云ふのであります。私はこれを惡いと云ふのではない、こんなに嚴しく取締られた國は世界中にないと申すのであります。

又酒と女には隨分身を犧牲にした者もありますが、支那人のやうに酒食と女色とに耽ることは、社會的に許されて居ない。俸給は安く、生活程度は低い、人間の弱点とする人生享樂を日本では知らない。それが一度支那舊來の習慣に由りますと、役人は賄賂は取り放題、博奕は打ち放題、コンミツションも取り放題…滿洲政府になつて、役人の方は無論肅正されてゐると信じま

すが、さういふ社會へ入りますれば、日本人は必ず、支那人の生活に感化され易い危險を持つて居ります。

現に日本人でアメリカに行つて居ります、殊に第二世などはアメリカ風の社會情勢に感化されて居るのもあります。況んやアメリカよりも、もつと人生享樂の自由なるところの支那に行きますれば、日本人の弱点が必ず支那人化される惧れがあるんぢやないかと、述べたところ、二三の人たちも矢張これを憂ひてゐるといつて同感を表されました。日本人は集團的な移民をやりさうして其處に日本民族の固有の生活様式を營みて、日本人の強い團結された新天地を造らない以上、サーベルの威力だけでやつてゐては、私は近き將來において滿洲なり支那なりに跳ね返へされて、さらに抗日、排日の騷動が起るやうな時期が來やしないかと憂へるのであります。

日本民族文化の大陸進出

日本内地では「森君に改良服の質問は禁物ぢや」といはれます、即ちあれを質問すると二時間半は演説を聽かなければならないと恐れられてゐますが、（笑）滿洲や朝鮮の人はこういふことを知りませんから到るところで質問が出ます。私は得たりや應とばかりに、新京、奉天、大連のロータリー倶樂部で……この倶樂部は時間が嚴重でありますから、十五分か二十分やる。すると次ぎから次ぎへと質問が出ますから、つひ大連では一時間以上もやりました。

その論旨は、私が滿洲に來て痛切に感ずるところは、この地における同胞が模倣歐米化生活をして居ることに不滿であると劈頭に喝破し、さて新京の國都建設の狀況を見まするとと、何れも愛知縣廳、若しくは市役所のやうな、東洋風の塔を持つて居て、少くとも純西洋式の塔を持つて居る建物は一つもない。

飜つて私は日本の丸の内を想像する、其處には幸に御所が中央にあります

から助かつてゐますが、若し宮城が中央になかつたら、あの丸の内はス・フか人絹から出來た歐米殖民地的の模倣都市に過ぎない。あれが萬世一系の天子を戴き、開闢已來三千年未だ曾て外國の侮りを受けないところの日本帝國の帝都の中心であるといふ誇りを有つことは出來ない。幸ひに新京へ來るとと聊か洋服に冠を戴いた觀はあるが、それでも東洋的な色彩が濃厚であるからまあ私は滿足に感じます。然るに諸君の生活樣式を見ると矢張りス・フ人絹製のヨーロッパ模倣の生活をしてゐられる。これでは支那人をして衷心より日本の文化を尊敬せしめ、依存せしめることは出來ません。諸君が若し滿洲の要人達と交際をされる時は、疊を布いた部屋を持ち、茶席を持ち、床の間には花を活け、掛物を掛け、香を焚き、御自分なり奥樣なりの點てられた茶を供し、食事は懐石で、主人自ら給仕をする、若し餘興の必要があれば主人が謠をうたふとか、立つて仕舞を舞ふ、といふやうな社交をやる、すると滿

洲人の方も、恰かも現在の日本のインテリが、佛壇か神棚かの如く、無ければならぬものとして、西洋風の應接間を持つやうに(笑)、日本間を造り、茶室を作るやうになる。少なくとも紅茶やコーヒーの代りに、番茶位は、瀬戸や清水やの道具を揃へて、出すやうになる。從つて家庭の娘や妻君やに茶の湯を教へなければならない、活花も教へなければならない、謠曲や、長唄や遂には俳句、和歌なども稽古させなければならぬといふ必要を彼等支那人に感得せしめることになる。斯の如くして彼等をして日本は單に一足先きに西洋を模倣したから我々より強いのぢやない、日本には世界に類例のない高い固有の文明を持つて居る、それが今日の日本をして富强ならしめた所以であるといふことを、根本から彼等に理會し、認識せしめる必要があるんぢやないか。然らずんば歐米文化を模倣して居る日本の姿だけを滿洲で見て居つては、彼等の歐米依存の觀念は決して拭ひ去ることは出來ない。蔣介石の歐米

依存を、よく諸君が反對するが、諸君自身が歐米崇拜で、洋服を着るのが優越に見えたり、ハイカラに見えたり、來客にインチキなコーヒーを出すとか旨くもない洋食を食はしたりすることが、文化生活と心得ることではいかん失禮ですが、諸君の中に、御一人でも日本の民族文化の生活を理會し、またそれを實地にやられる方があるでしやうかと極言いたしました。後で聽きますと「どうも君はヒドイことをいふ、今日來てゐた人たちは、若い時から滿洲で働いた人、或は學校出の官吏上りとか、會社重役ですから、恐らく日本人の眞の日本風の生活樣式を知つた人はあるまい。しかし君の話はよかつたあれで溜飲が下がつた」といつてゐました。私も相當痛烈であつたと思ひましたが、滿洲の滯留は明日一日であつたから、退去を命ぜられても、一向構はないと思つてやりました。（笑聲）

日本内地の指導階級には餘りに深く明治、大正の歐化文明主義が染み込んで歐化生活が傳統となつてる。故に日本民族の復興的新生活は、むしろ植民地の新しい天地から生まれなければならない。北滿佳木斯の農村作業の寫眞を見まするに、そこに働いてる婦人たちは、東北のモンペをはいて居るのを見まして、私は非常に心強く感じたのであります。どうかこの風俗を何時々々までも維持發展さして行きたいものであると考へきせられます。（拍手）

昭和十三年六月廿五日印刷
昭和十三年七月　七日發行　（非賣品）

著者兼發行人　名古屋市中區西川端町一ノ五　森　一　兵

印刷人　名古屋市東區吳服町五ノ二　鬼頭與三兵衛

印刷所　名古屋市東區吳服町五ノ二　鬼頭商店印刷部

終